

第3回青森県生涯学習審議会 概要

- 1 日 時 平成27年7月17日(金) 14:00~16:30
- 2 場 所 青森県総合社会教育センター 4階第2教材開発室
- 3 出席者 <委員>
浮木隆、上野修子、太田博之、岡詩子、工藤清子、駒井昭雄、鹿内葵、
澁谷尚子、西澤ナミ子、原英輔 (敬称略)
<青森県教育委員会>
教育次長 奈良和仁
生涯学習課長 児玉政光
学校地域連携推進監・課長代理 渡部靖之
企画振興グループマネージャー 森田勝博
(他事務局2名、総合社会教育センター2名)
- 4 案 件 (1) 審議テーマに基づく審議の柱の内容について
(2) 審議テーマに関連する先進事例視察の実施希望について
(3) その他
- 5 配付資料
 - ・次第、青森県生涯学習審議会委員名簿、座席図
 - ・資料1 審議テーマと、審議の柱について
 - ・資料2 第12期審議会のスケジュール(予定)
 - ・参考資料1 青森県基本計画未来を変える挑戦~強みをとことん、課題をチャンスに~
 - ・参考資料2 まち・ひと・しごと創生青森県総合戦略素案
- 6 審議概要 (◇会長、副会長 ◆委員 ○事務局)
(1) 審議テーマに基づく審議の柱の内容について
①審議テーマについて
○事務局より、審議テーマと審議の柱の内容について資料1により説明します。説明後、御意見をお伺いしたいと思います。
A案「ふるさとの良さ、あおもりの魅力を次代に伝えるための、学びと地域のつながりづくりの在り方について」
B案「ふるさとあおもりの魅力を生かした学びと活動の在り方について」
◇ 審議テーマは基本的に県の施策や考え方をベースとして設定する。
◆ 自分の地域に魅力を持つ人たちが育ち、つながり、学びを実践してほしい。
◆ 魅力を生かすことも大事だが、伝えていくことが必要。そのためには何ができるのか、どのような方法があるのかについて柱を立てて述べるべき。
◆ A案は「次代に伝える」という目的意識が明確である。
◆ A案は「良さ」「魅力」「次代」「つながり」という4つの言葉がわかりやすい。良い言葉はあえて口に出してほしいし、青森をもっと良い所だと思ってほしい。
◆ A案の「ための」という部分を削除してはどうか。
◆ 既に多くの方が潜在的に青森の魅力を理解しており、魅力をそれぞれが引き出し、良さを

伝えることが「生かして」いくことだと考えることができる。

- ◆ 普段から見聞きし、無意識で思っている良さに気づいてほしいということも含む。
- ◆ B案には「学びの在り方」という言葉があり、より大きな範囲を捉えることができる。
- ◆ 「次代に伝える」ことだけが目的になってしまうのはよくない。
- ◆ 審議の範囲をどうするかにもよるが、どちらの案にも「ふるさと」あるいは「あおもりの魅力」という言葉が入っているので、どちらでも良い。
- ◆ テーマ設定にはあまり時間をかけずに進めた方が良いので、会長一任としてはどうか。
- ◇ 生涯学習を通じて何ができるか、社会教育の在り方で県や地域を変えるという意識は、委員に共通していると思う。このような理由から、私は資料1 A案を採用したい。

地域の中のつながりを安定化しなければ、これからの人口減少に向けての課題克服は難しい。「魅力」については良さが十分伝わっているという意見があったが、さらに魅力を伝えるのだという意思を持った取り組みを強化することを含め、「魅力を次代に伝える」という言葉が大事であると考えている。

第12期の審議テーマは「ふるさとの良さ、あおもりの魅力を次代に伝えるための、学びと地域のつながりづくりの在り方について」とし、意見のあった「ための」という部分については事務局と調整した上で決めさせていただくということによろしいか。

審議テーマについては「ふるさとの良さ、あおもりの魅力を次代に伝えるための、学びと地域のつながりづくりの在り方について」で、一部調整とした。

②審議の柱について

◇ 次に、審議の柱に関する内容についてであるが、これまでの審議を整理し、4つに絞った「大人の主体的な学び」、「地域の未来の担い手育成」、「地域のつながりづくり」、「若者のふるさと回帰」という柱の中身と、新たに追加する項目等がないか御意見を伺いたい

- ◆ 「若者のふるさと回帰」について、どうしたら地元を離れた人たちが戻ってくるか。若者と我々とは世代や考え方が違うため、青森の良さ、生活のしやすさなどについて直接聞くのが良いのではないか。

若者は情報の取得手段としてインターネットへの依存傾向が強く、調べてもヒットしなければ、それは地元には無いものだと思い込んでしまっているのではないか。我々やもっと上の世代が、地元ではどこに行き誰に会えば良いかを教えることができれば、若者はもっと地元の良さに気付くかもしれない。若者は何が欲しいのか知る必要がある。

- ◆ 移住者の増加策として、受け入れ環境を整えなければならない。自然環境は厳しいが、人的な温かさで迎えるなど、心地よいと感じてもらわなければならない。

仕事がないから戻れないとも言われるが、自ら仕事を創り出すような勢いがなければならぬ。ゼロからの起業は経済的に大変だが、青森の魅力を生かした多くの前例もあり、成功者の姿を見せることが活性化につながるのではないか。

地域づくりの手法として、これまではイベントの仕掛けや祭りの活性化が取り上げられていた。未来の担い手育成の方法として、子どもたちを祭りに誘い、巻き込み、参加する楽しみを味わってもらうと関わる人が増え、地域のつながり作りにつながり、やがて担い手になっていく可能性があるからではないか。

学びを生かすとは、参加したら楽しかったという体験が一種の学びであり、体験を基に自分から行動を起こすことが地域の活動につながるということではないか。仕掛けの場としては学校、公民館、祭りの会場などがあり、ひとつひとつの積み重ねが大事になると思う。

育成の方法をどうするかであるが、魅力的なことを考えられる人、イベントを考えることができる人を増やしていくことが、人づくりのための方策ということではないか。

- ◇ UターンIターンは若者に限らず、首都圏に出て働き、シニア世代になった方々がふるさとに帰り、自分の人生を振り返りながら生きていくというのは考えられることである。シニア世代の方々のUターンIターンは、どの項目に入れたら良いか。
- ◆ 地域のつながりづくりをする中で、シニア世代が地域に入っていくという考え方をすれば良いのではないか。
- ◇ 地域のつながりがしっかりあるからこそ帰ってくるができるという考え方で、反対に昔と比べると地域がばらばらで、帰ることが嫌だと感じるという考えも出てくるかもしれない。このことから、地域のつながりづくりの項目に、何かしらの意見を盛り込むべきである。
- ◆ 実は地域のつながりができていないところが多いのではないか。それをしっかりさせるためのきっかけを盛り込む、あるいは受け入れ態勢がしっかりしていないと誰も来ないという投げかけをしてはどうか。
- ◆ 危機感が不足しているのではないか。地域づくりの活動に一生懸命なところには危機感がある。このままでは地域がなくなるという危機感が仲間づくりを支えているのではないか。
- ◆ 大きなイベントを開かなくても、地道な活動の継続が生きるのではないか。
 小中野中学校では、全校生徒に祭りの囃子や太鼓、踊り等の体験をさせている。指導に来られる親方たちは、この中から一人でも二人でも実際の祭りに参加してくれればありがたいと話され、長い目で後継者の育成を期待していることが伝わってきた。全身体験は無駄かもしれないが、地道な種蒔きが必要だと考え、学校の活動として取り組んでいる。
 八戸市は地域密着型教育を実施しており、市内の全小中学校がなんらかの形で地域との関わりを持つ取組をしている。
- ◇ ふるさと、郷土の伝統芸能などが忘れ去られていく中で、総合学習で取り組まれているのは素晴らしいことであるし、キャリア教育に関する議論の題材にもなる。
 地域密着型教育の取組は、八戸版コミュニティ・スクールということではないか。大人と子どもが関わることはとても大事なことであり、地域のつながりづくりにもなる。
- ◆ 今の話とは反対になるが、あるテレビ番組で田舎に戻った方が町内会や祭りをはじめ、様々な行事に参加しなければならず、逆に大変だという話をしていた。
 何かを引き受けるとか、そういった縛りのない地域を作ってもいいのではないか。
- ◆ 地域に関わりたくないという考えを持った人が戻ってきても、人口は増えるが地域は活性化しない。地域の行事や祭りを楽しいと思える人でなければ、地域の元気にはつながらない。
- ◆ 町内会に入らない方が増えているが、町内会側にも閉塞的なところもあるので、そのような意識をどう変えていけるのかを考えることも必要だと思う。
 地区の運動会にも人が集まらない。実施に向けて一生懸命取り組んでいても、若者が来ないのであれば、やり方自体を変えていかなければならない。
 地域コミュニティからテーマコミュニティへの変化が進んでおり、地域においても好きな者同士が集まるようになってきているのではないか。
- ◆ そのような現状で構わないと考えるのであれば何も問題は出ない。都会においてもそのような現状を良しとはしていないはずで、現状を認めつつも、どう打破していくかということではないか。
- ◆ そのような現状があることを前提にして地域の活動を見直していかなければならない。同じことをずっとやっても、参加者は減っていくだけである。
- ◆ 地域の活動がイベント指向となり、目的化してしまっている。地域の目的を達するために何をすべきかをもう一度考えるべき時代になってきている。
 以前は地域づくりが活発だった地区が弱体化しており、それは社会教育が弱体化したのだという人もいる。地域の指導者の考え方やそれについていく仲間、前の人と同じことをやっていたらいいのだという意識が、このような現状を招いたのではないか。

地域の良さを理解しようとしないうか、誇りに思わない住民が多い。理解しようとし、子どもと一緒に地域に参加しなければ、つながりができていかない。

問題解決は1人ではできない。リーダーは決断力があれば良いが、組織の体制をしっかりとしなければ、活動や事業の目的がわからなくなってしまう。基本的なことをやっていくことで、それぞれの地区のつながりもでき、未来の育成にもつながり、若者がうまく地域の祭りに参加したり地域の活動に関わったりすることで帰ってくる。いかにして地域で子どもを育むか、どう考えていくかということである。

社会教育の弱体化があると言われたが、住民はなぜ自分たちで考えないのか、なぜ自分たちで気づこうとしないのか、そこまで行政が手をかけなければならないのか、と考え込んでしまった。そこで、対策として公民館職員のレベルアップと、40代50代の若い人たちが自分の力で課題を解決する力を身に付けるための学習会を開こうと考えている。最初は人が集まらないだろう。参加者を集めるための声掛け等を町内会長に任せるのではなく、民生委員なりが関わってつながっていくといったことを考え、住民自らが行動するという意識を持たなければならないと考えている。

◇ 第9期から審議会に参加しているが、生涯学習、社会教育の必要性といった課題は解決されておらず、人口の減少と相まって衰退してきている。今の話はそれを裏付けている。

最近は様々な問題解決のためのフォーラムやワークショップ等に、いかに高校生を呼ぶかということの主催者が考えているが、若者にテーブルに着いてもらい、意見や考え方をしっかり共有しないとならない時代になっているのかもしれない。

今期は危機感を持って臨まなければならないということについては、委員全員が共通して意識していると思う。解決に向かう基本的な考え方は「課題をチャンスに」なのではないか。地域のつながりの崩壊や、地域に誇りが持てないという問題を、どういう形で報告書に書き出し、解決に向かう方策を打ち出せるかが我々の課題である。

- ◆ 私のNPOでは町内運動会の企画に加わり、種目ややり方を変えることで活性化を図ったところ、徐々に参加人数が増えている。この仕事は地域コミュニティとテーマコミュニティの融合を基本理念としており、我々が持つスポーツに関する情報を実践に変える場を作ることができればいいのではないかと考えている。
- ◆ 地域活動にはコミュニティ型とテーマ型があるが、コミュニティ型の活動者はテーマ型を少し敬遠する気持ちを持っていた。しかし、気が付くとコミュニティの方はだんだんと疲弊しており、上手く町内会のやっている行事とテーマ型の考えがマッチすれば、町内のつながりづくりにも効果があるのだと思う。スポーツや子育てといったテーマということではなくても、ジャンル別での事例もたくさんあるのではないかと。
- ◆ 私がやっているプロジェクトは、初めは何かを手作りしたい人たちの集まりとして立ち上げた。町には子育て支援サークルがあるが、一緒に何かしないかとの誘いがあり、小さな子どもを持つ母親にとって役立つものを作る手作り教室を実施したところ、多くの参加者があり、参加者同士のつながりもできて、町の人からも高い評価をいただいた。地域コミュニティとテーマコミュニティという話を聞き、私の活動もそういうことだったのではないかと思ひ、テーマというのも人をつなぐもののだと思った。

◇ 子育てママさんのコミュニティは幼稚園や保育園という括りであることが多く、隣人同士のコミュニティは盛んではない。子育てだけのことだけではなく、明確な目標を持って活動し、様々な部分で地域に貢献して存在感を出していくことで、何か事業等につながっていくこともあるのではないかと。

- ◆ 青森の事業主の方々はどうだけ雇用のための努力をしてくださっているのか。努力していることや頑張っている取組などについて見せていただきたい。

首都圏で大企業に就職することに比べ、青森では自分を高められないのではないかと

ことを聞いたことがある。もっと事業主の顔が見えて、ここで生活していける、これだけ受け入れる人がいるということを見せることができないか。

- ◆ 仕事とは、本来、生きがいである。Uターンしてきた息子はわからないことがたくさんありながらも、会社経営の裁量権を持つ仕事に取り組んでおり、そこに生きがいを感じていると思う。地方には小さい企業が多く、首都圏から戻ってきて仕事を始めると、はじめから裁量権が与えられることが多い。裁量権があるという魅力や、会社を興すことも簡単にできる。実際にやっている人間から魅力を伝えるということが良いのではないか。

私は子どもたちを一度は都会へ出してやるべきだと思う。都会を肌で感じた上で、それでも地元がいいという若者たちが戻ってくるということが積み重なり、本当に強い地域が作られ活性化していくのではないか。高校では様々な職業のトップランナーを呼んで講演会等を開いているが、地元から一度出て戻ってきた人たちに、なぜ帰ってきたか、地元のどこが魅力なのかということを通じて話してもらおう機会を持つことも良いのではないか。

我々の感覚にある組織や町内会といった基準を若者に与えても、なかなかうまくいかないと思う。今は組織と言えないような集まりもある。我々であれば何かしらの事業を実施し、その成果は組織の仕組みの変化や集客といった尺度を使っていたが、それとは別の、若者特有の尺度で集まっている集団に、どう働きかけ、底上げしていくかという観点も必要ではないか。つながりづくりにも入ると思うが、既存の組織の評価に加え、もうひとつの視点として介入できないようなつながりづくりというか、そういうものを底上げしていくという、それでどうするかという考えも持たなければならぬのではないか。

さらに、祭りや伝統を守るという視点では、変えるべきところは変える、変えることによって変わっていく、伝統というのは革新の連続であり、変えていくことでしっかりしていくという視点もあると思うので、いままでのやり方にとらわれずどんどん変えていく、変えたことで失敗したならば元に戻す、そういう視点で伝統行事をやっていけばいいのではないか。

下北は人口が少なく、知っている人ばかりである。少ないことも良さとして捉えることができるのではないか。人が増えるというのは、今いる人たちにまた知っている人が加わっていく、そういう流れができるということではないか。

- ◆ 最初から関わりができていて、PTAなどに働きかけるというのも必要である。

活動中の組織が関わりを持たない方を集めるためには、変革をし、魅力を発信し続けなければならないが、そのような動きが苦しそうに見えては誰もこないだろうし、変化していくことが楽しいということが伝わらなければやらないのではないか。

好きなことには関わろうとする意欲は高く、趣味の集まりには多くの参加者がある。その集まりと同じ日に開催された別の祭りも盛況で、これまで下火だったイベントも引きずられるように参加者が増えている。相乗効果が認められることから、新しい仕掛けの手法になるのではないか。

人口が減り元気のない地域では、キーマンが参画して地域活性化を成功させている事例がある。キーマンとして外から来る人は、地域の住民が気付かない魅力を見つけてくれる。それを受けとめる地域の人と、支援する行政の人がいるというのが理想ではないか。危機感のなさとも連動しているのではないか。立場の異なる同調者が現れれば、様々な活動につながっていきやすい。

三重県で高校生レストランを仕掛けた岸川氏を招いて活性化を図ろうとしている人は深浦町に移住してきた人だが、とても一生懸命で、今度、深浦校舎の生徒を連れて三重に行くそうである。この方のように外から人を呼び、刺激を受けるということでも良いのではないか。

- ◇ アクティブシニアのUターン者が、その役を担う可能性もあるのではないか。
- ◆ あり得る。都会に出たからこそ分かることがあると思うし、そういう人は情熱が違う。
- ◇ 行政の関わりについては、今の発想はすばらしい。きっかけづくりを行政にしてもらうの

が良いと思う。

- ◆ 行政の方には、戻ってきた方を支援する仕事をしてほしい。
- ◇ 明確な結論に至らないため、事務局で委員の発言をうまく仕分けし、項目の見直しも含めて整理して、次の審議会で案を示してほしい。

若者から直接意見を聞く、移住者を増やすための環境を整える、子どもたちに様々な体験をさせることが未来の担い手育成につながる、危機感を持ち地域を活性化する方策を考える、地域コミュニティとテーマコミュニティの融合を図る、地域に誇りを持つための方策を考える、伝統とは革新の連続であり変化していくもの、キーマンの呼び込みと行政の支援、という意見が出された。

これらを事務局で分類、整理することとした。

(2) 審議テーマに関連する先進事例視察の実施希望について

- ◇ 首都圏への視察ならば、代表として2人程度が行くことになる。
 - 近隣県で人口減少に対応するコミュニティの実践例や、小さな拠点作りをしているような視察先を見つけることができれば、委員全員で視察に行く旅費は確保できそうだが、本日は具体的な視察先を提示できない。
 - または、第11期同様、委員がそれぞれ県内の先進事例視察を行い、報告してもらおうという案もある。
 - 視察実施の手法を決めたいので、御意見を伺いたい。
- 前回の審議会で小さな拠点が話題になったので検索したら、秋田県の由利本荘に、道の駅等を再生しながら多機能型の「小さな拠点」づくりをしているところがある。
- ◇ 代表者報告よりは全員で視察に出向くことで、それぞれの感覚や視点の違いが、その後の議論の幅を広げるのではないか。
 - ◆ 前はどのようなやり方をしたのか。報告会のようなこともしたのか。
 - ◇ 委員ごとに県内で活躍するリーダーを指名し、事務局も同行の上インタビューに同形で現場を見せていただきながら、「なぜあなたはここまで頑張れますか」、「なぜ成功できているのですか」「これまでどんな苦労がありましたか」ということを、活動者本人に直接聞いた。訪問後は委員が報告書を作成し、それを基に次の審議会で1人5分程度の報告をした。
 - ◆ 委員が個人ごとに自ら視察先を見つけなければならなかったため、大変であった。
 - ◆ もし行き先が秋田になるのならば、五城目にも行きたい。由利本荘は「小さな拠点」という目的で、五城目は「移住」をテーマにしてはどうか。
- ◇ 距離があるが、折角の機会であり、少し足を伸ばせば2ヶ所見ることができるのであれば実施してみたい。
 - では、全員でバスを使って県外へ出掛けることとし、視察場所、宿泊の可否等は事務局と相談して決定する。視察の場所については、委員の皆様からも情報を提供していただきたい。

委員全員を参加対象とした視察を実施することとし、日程、視察先等は後日事務局が案を提案し、会長が決定することとした。

(3) その他

- ◇ 視察の日程の関係から、審議会は予定を変更し、全5回にする。
 - 視察日程は早めに決めてお知らせし、1人でも多くの委員が参加できるよう調整を図る。